

第1巻 第1号 (Vol.1 No.1)

東京学芸大学出版会 (Tokyo Gakugei University Press)

発行日 2001年7月7日

発行 東京学芸大学出版会設立準備会

編集 東京学芸大学出版会設立準備会事務局



# 学芸大 *Press News*

## 目次:

- 東京学芸大学出版会、いよいよ船出! 設立に向けて邁進中: 2面  
東京学芸大学出版会設立についての趣意: 2面  
沢山の御賛同、有り難うございます。- 寄付金納付者一覧 -: 3面  
設立記念出版事業『これからの教育と大学』刊行に向けて: 3面  
寸言: “学芸大Press News”に期待する(池田 義人): 4面  
寄稿: 出版会設立準備会に参加して(湯浅 佳子): 4面  
編集後記: 4面

## 出版会、いよいよ船出！ 設立に向けて邁進中

去る6月20日に行われた平成13年度第2回教授会に於いて、東京学芸大学出版会設立の提案がなされた。代表は鷲山 恭彦図書館長。

学芸大出版会の設立は、平成6年以来、一部有志の手によって、その準備が進められてきた。当初は寄付金も集まらず、作業の進捗もはかばかしいものではなかったが、本年度に入ってから出版会設立準備会の委員たちの尽力もあり、急速に設立に向けての機運が高まった。出版会設立準備会のメンバーには、鷲山図書館長、渡邊健治二部長らを中心に、各部から有志が名を連ね、毎月運営会議がもたれている。また、池田義人第三部助教授を事務局長とする事務局は、2週に1度ほどのペースで集まり、作業を続けてきている。

目下のところ、11月3日のホームカミングデーでの設立総会に向けて、設立記念事業として『これからの教育と大学』の刊行を考えており、これに向けて委員一丸となって取り組んでいる(3面に関連記事)。

## 東京学芸大学出版会設立に関する趣意

6月20日の教授会時での提案では、東京学芸大学出版会の設立に関して、趣意、提案に到るまでの経緯、設立総会に向けての日程、骨子(案)、規約(案)、運営方法(案)、組織構成(案)、などが文書で提示された。ここでは、以下に趣意書(案)の部分を再掲載しておきたい。

### 設立趣意書(案)

21世紀を迎え、新しい時代のとば口に立った今、政治、経済、文化など様々な分野で、生みの苦しみとも言える状況が続いている。教育もその例外でなく、子供たちを取り巻く生活環境、家族環境、学習環境の急激な変容によって、教育の場には、これまでには考えられなかったような様々な問題が噴出し、従来の知識、経験、方法では、対応が困難な問題が数多く生じてきている。こうした現代的な教育課題に対する国民的な関心は高く、教育の在り方そのものを問う声すらも起こりはじめており、人間形成と社会形成の新しい在り方が切実に模索されてきている。

こうした状況にあって、日本の教員養成系大学の中核に位置する東京学芸大学は、我が国の教育の在り方全般に対し、重い責任と義務を自覚せざるを得ない。東京学芸大学は「有為の教育者」の養成を学是とし、長い間、多くの有能な人材を教育界に送り出してきた。その専門領域は人文科学から社会科学、自然科学から芸術、体育学まで多彩な分野にわたっており、新しい時代にふさわしい新しい思想と新しい方法の探求が行なわれている。

新しい思想と方法は、時代の苦悩、社会の矛盾との対決のなかからこそ生み出されてくると考える。そうであるならば、現代の状況を必ずしも悲観的にのみ捉える必要はあるまい。大学における研究と教育を通じ、教育現場のさまざまな実践を通じて、これまでも大学は時々の時代の様々に切実な課題に誠実に対応してきた。いまこそ大学は、こうした経験を踏まえ、研究と教育の蓄積された知識と方法を、これまで以上に最大限活用して事態に対処していくべきであろう。そのための最も具体的で直截的な方法として、学術図書は勿論であるが、教育に関する様々な切り口の図書の出版を提案する。

新しい時代にむけ、人間や人間社会の新しい在り方が模索されている今日、子供たち、教師、保護者、そして研究者に参考となり、活用してもらえるようなよい本を出版していくことにより、大学が教育と文化に関する新しい情報発信機能をはたすことにもなって、東京学芸大学はこれまで以上に広く教育界に貢献していくが可能となるのではないかと。現代の教育課題への対応、歴史と伝統の継承、新しい文化の知的創造、国際的な文化交流や相互理解等さまざまな展開が考えられてくる。

しかしながら、大学における学問的達成をどのようにし、どのような言葉で、子供たちや保護者たち、広くは国民に媒介していくのか、その方法は決して生易しいものではあるまい。これまでの人類の遺産を学び伝え、今に生かし、未来への財産にしていってもらうようにするというを分かり易い言葉を使って行なっていくのは大変な事業である。しかし、教育というのはある意味でまさにこうした営みそのものを指すのではないかと。

「文化と教育の世紀」といわれている21世紀の教育の中核的機能を担うべき東京学芸大学に、相応しい役割が多方面から求められてきていることを自覚し、新しい時代の新しい文化の受容と継承と創造のダイナミックな過程の一翼を積極的に担っていくことを目指して、いまここに東京学芸大学出版会の設立を提案するものである。

(文案：鷲山 恭彦図書館長)

## 沢山の御賛同、有り難うございます。—寄付金納付者一覧—

平成13年7月6日現在の寄付金受け入れ状況は以下の通りであり、総勢112名となった。

### 寄付金納付者一覧(平成13年7月6日現在、所属部別・順不同・敬称略)

<第一部> 関連(28名) 岡本靖正、荒尾ヨシ秀、鷲山恭彦、馬淵貞利、大熊徹、黒石陽子、須賀房江、鈴木二千六、高橋忠彦、高橋久子、千田洋幸、根本正義、湯浅佳子、大矢タカヤス、平野具男、高田滋、村松泰子、森田数実、山田昌弘、野呂芳明、浅野智彦、清水洋行、高数学、久場嬉子、森田侑男、山下脩二、君島和彦、鈴木健之

<第二部> 関連(33名) 上野一彦、渡邊健治、江川ピン成、君塚仁彦、陣内靖彦、氏森英亞、加瀬進、國分充、澤隆史、須藤貢明、濱田豊彦、松矢勝宏、岩瀬泰子、大河原美以、岸学、佐野秀樹、大竹美登利、倉持清美、田村毅、鳴海多恵子、竹中弘子、劉徳強、岩田康之、金子真理子、木俣美樹男、池田一成、伊藤良子、太田昌孝、大伴潔、奥住秀之、小池敏英、腰越滋、藤井穂高

<第三部> 関連(28名) 長谷川貞夫、長谷川正、生尾光、小川治雄、滝澤靖臣、山崎裕子、池田義人、清水美恵、滝沢清、田中祥雄、飯田秀利、犀川政稔、高城忠、中田正隆、丸山健人、森厚、小川潔、金沢育三、伊藤正貴、岡崎恵視、鎌田正裕、下條隆嗣、松川正樹、小林興、中西史、吉原伸敏、真山茂樹、吉野正巳

<第四部> 関連(18名) 細江文利、金田潮兒、久保田慶一、澤崎眞彦、筒石賢昭、坂口謙一、射手矢岬、鈴木秀人、柴田義春、杉原隆、大橋道雄、永島惇正、室屋隆吾、渡辺雅之、河村正之、蓮尾力、山田一美、山田嘉彦

<元教職員> 関連(5名) 宇賀神米蔵、大井みさほ、宮腰賢、吉尾二郎、鶴原喬

寄付金に関しましては、一口千円以上で、任意の額を御納入頂いております。学芸大学出版会の趣旨に御賛同下さる方は、現在も引き続き寄付金を受け付けておりますので、何卒御協力の程、お願い申し上げます。

## 設立記念出版事業『これからの教育と大学』刊行に向けて

出版会設立準備会では、11月3日のホームカミングデーでの設立総会に向けて、設立記念事業として『これからの教育と大学』の刊行を考えている。内容・構成は検討の結果、以下の通りとなった。なお、内容・構成を検討しながら、各章の各々の節ごとに執筆者を絞り込み、既にほぼ全ての節に関して、原稿執筆依頼者が決定済みである。そして現段階では、依頼を承引してくれた執筆者からの原稿を心待ちにしている状態であり、夏休み中盤から、原稿の回収・校正・編集等の実際的な作業に入っていくことを予定している。

### 『(仮題)これからの教育と大学』の内容・構成

#### 序論(未定)

第1章 学校 (第1節 変貌する教室、第2節 問われる学校教育、第3節 新しい授業の試み、第4節 新学力観と総合学習、第5節 情報化教育の展開、第6節 国際化に対応した教育、第7節 特別支援教育、第8節 開かれた学校)

第2章 生涯学習と地球市民教育 (第1節 子育て支援と就学前の教育、第2節 人間の尊厳と生命倫理、第3節 共生社会と個人の幸福、第4節 科学と自然環境)

第3章 求められる教師像 (第1節 はじめに、第2節 学力をつける、第3節 時代の求めるカリキュラム、第4節 生き生きとしたクラスルーム、第5節 魅力ある実践、第6節 支えあう教育、第7節 個を認め合う教育、第8節 温もりのある実践、第9節 学びから実践の開拓へ)

第4章 これからの教育と大学の在り方 (第1節 揺れ動く教育系大学・学部、第2節 多様化する教員養成、第3節 学び・育て・教えるために、第4節 可能性を求める附属学校、第5節 広がる大学院教育、第6節 求められる人間教育)

総論 まとめ



寸言：“学芸大Press News”に期待する 池田義人(第三部数学)

苦節5年、念願の東京学芸大学出版会が、このたびようやく生命の灯を点し始めた。無論まだ母親の胎内で密かな胎動を始めたという段階で、たとえ11月3日の出産予定日を無事に迎えたとしても、七五三が済むまではなかなか安心できない。まして昨今の激動するご時世である。どんな凶事によって、せつかくの生命の灯が消えてしまうかも知れない。何とかしてこの尊い生命を立派な大樹に育てあげていただきたいと切に願う。ところで、この春より、愛読している文芸春秋で宮城谷昌光氏の三国志が連載されている。その影響もあって、このところ中国の歴史、特に前漢、後漢の時代に興味を持ち、十八史略などを時折紐解いている。「楊震の四知」とか、「養老の礼」とか、現代にも通じるさまざまなエピソードの宝庫を堪能することも楽しいが、栄枯盛衰の理を垣間見て、歴史のすさまじさに嘆息することもまた楽しい。活字のなかに夢幻の世界が無限に広がっていることを実感する。そしてつくづく思うのである。この2千年、人類はどれほどの進歩をとげたのであろうか。確かに2千年前、原子爆弾はなかった。遺伝子治療など及びもしなかった。しかし、こうした科学の進歩をそのまま人類の進歩と呼んでしまってよいものかどうか。むしろ、品性と徳性の部分でずいぶん退歩してしまっている部分も多いのではないか。本当の知性はどうなんだろう。史書によれば昔の人は戦場で容赦なく殺戮をした。しかし5歳、6歳の幼児まで包丁で追い掛け回し、虫を殺すように刺し殺したりしたのだろうか。母親を殺したり、理由なく「親父狩り」をしたりしたのだろうか。いったいこの2千年間、人間の本性はどれほどの進歩をとげたのであろうか。こう考えると、改めて教育の持つ深い重要性を認識せざるを得ない。教育改革は行われてもよい。しかし本当に重要で正しい改革が行われるためには、本当の教育論議がもっとたくさん沸き上がってくる必要がある。人間はいかに生きるべきか。どのような青少年を育むべきか。青臭いなどというのはやめよう。青臭くてもかび臭くてもよいではないか。こうした論議のなかからのみ新しい文化と希望の芽が生まれてくるものと信ずる。このたび学芸大プレスニュース発行に際して心から期待することは、今後このニュースの紙面に寄せられるさまざまな教育論議の持つ潜在的な起爆力である。はじめはささやかな試みかも知れない。しかし、東京学芸大学出版会が大きな樹に育った暁には、このニュースの持つ役割は大きく評価されるものとなるに違いない。また、是非そうやって欲しい。このNewsは間違いなく東京学芸大学出版会の母であり父であり、先生であり友人であり、水であり空気であり、食べ物であり、生命そのものでもあると思っている。

寄稿：出版会設立準備会に参加して 湯浅佳子(第一部国文学)

出版会設立準備会に参加して数ヶ月が過ぎた。幾度か開かれた会議では、出版会を設立する意義、そして出版物の内容について検討が重ねられてきた。学科を越えた先生方の集まりに、何もわからないながらもとにかく加わって、さまざまな意見を聞くことができたことは得難い経験であったと思う。学芸大学の将来を考える時に、あらゆる問題が提起された。それは、卒業・修了生の就職・進路のこと、学力のこと、カリキュラム構成、国際化、情報化、地域との連携など多岐にわたるものであったが、それらの議論を経ながら、大学がどのような理想の教師・社会人像を描き、学生をどのように育てていくのかという問題が焦点化され、模索されていった。その中で、「和の喪失」ということが問いかけられていた。人と人との和、心の触れ合いが損なわれつつあるという。閉塞の時代のせいかもしれないが、あらゆる場において、学生同士の、そして教官と学生間の心の交流はまず何よりも不可欠なものである。心の和の場を学生に提供できるような大学でありたいと思う。そのようなことを考えながら、このたび出版されようとする本『これからの教育と大学』に拙いながらも関わることによって、これからの東京学芸大学のあり方を少しでも見付けていければと思っている。

編集後記：有志の先生方間で始められた学大出版会の作業ですが、寄付も徐々に集まり、学内のご理解も広がっていることは有り難いことです。現在の出版会の中心は、設立準備会事務局の教官ですが、人数が少ない上、校務の合間をぬっての作業のため、人手不足は否めません。今後は記念出版の作業は無論のこと、Pressをホームページにも載せたり出版会のロゴをデザインしたりという具合に、活動の幅を広げて参りますので、手伝ってもよいという方がいらっしゃったら、下記の連絡先までご連絡下さいませよう、宜しく願い申し上げます。お待ちしております。(腰越 滋 第二部教育学)

## 東京学芸大学出版会(Tokyo Gakugei University Press)

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学内 20周年記念館2階

編集：渡邊健治(出版会編集長)・池田義人(事務局長)・腰越滋(Press編集長)

Pressについての連絡先： Email [koshigoe@u-gakugei.ac.jp](mailto:koshigoe@u-gakugei.ac.jp) 又は 電話&Fax 042(329)7340(腰越研)